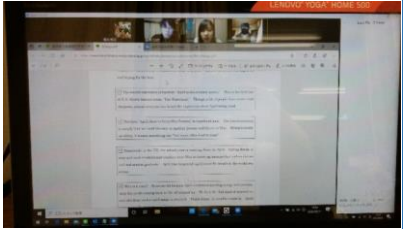



団体名	NPO法人 ユースコミュニティー	活動タイトル	ひとり親家庭など、生活困窮世帯の高校生への学習支援事業				
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景				
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<p>子どもの貧困が叫ばれる中、子ども達が生まれた育った環境に左右されず、学ぶ機会を担保していき、将来の進路選択の幅を広げていきたい。可能性のある子どもの将来を、家庭環境（経済的環境）によって制限され、社会で活躍する機会を失ってしまうことは、その子どものみならず、社会にとっても大きな損失だと考える。特に、高校生世代は義務教育と異なり、社会的な支援が不足している。高校生世代は将来の進路（生き方）を決定する重要な時期であり、家庭（保護者）の果たす役割は重要である。しかし、ひとり親家庭や生活困窮家庭では、経済的な部分だけでなく、情緒面での子どものフォローも不足しがちであり、学校・行政・地域からの支援が必要となっている。</p>		 <p>授業の様子</p>				
● 団体の社会的役割 (ミッション)	<p>子どもの貧困を学習面から支える活動（学習支援）が日本全国で広がっている。しかしながら、ほとんどの団体の支援対象は原則中学生までであり、高校入学と同時に関係性が切れてしまう問題を抱えている。私たちが同様の課題を抱えつつも、今回の助成事業によってその克服をめざし、上記のビジョンを実現するため高校生世代の専用クラスを取り組むものである。（生活困窮世帯の）高校生の学習支援活動によって、中退防止と基礎学力の定着、将来の進路選択、さらには困窮世帯の特有の悩みや丁寧な寄り添っていき、子ども達が具体的な将来像を描いているよう、困難を抱える高校生の「居場所と学びの場」を地域の支援者で創出。子ども達とその保護者が未来に希望を持つことができるような地域社会の実現をめざしていく。</p>						
● 団体の活動基盤	<p>高校生の学習指導は、小中学生の指導と比較して、講師側に高いスキルが要求されることから、効果的な人材育成を進めていく必要がある。講師検定試験ともリンクした研修や日々の実践の中で高校生の学習指導と情緒面の支えとなる支援者を育成していく。また、こうした高いスキルを維持していくためには、ボランティアベースでは限界もあり、一定程度の有償スタッフの配置も必要になってくる。その原資については、助成期間中に事業を活性化し、安定した収入を得るよう努めるとともに、賛同者を増やし、地域からの寄付金なども加え、安定的な財源が得られるような仕組みづくりを同時に進めていく。具体的には、助成事業終了後の事業継続に向けた、資金調達（寄付・会費、事業収入等）を立案し、実現のための具体的な取り組みについての単年度（中期的）計画案を作成する。</p>						
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)					
<p>主に中学生を対象にしてきた私たちの学習支援事業において、高校生を対象とした学習支援を新たに取り組みました。日本では、義務教育年齢を超えてしまうと、支援制度が手薄になります。そこで、将来のキャリアに直結する重要な時期である高校生の支援を充実させることを団体の新たな目標と位置づけ、教室での学習サポートのみならず相談活動を重視しました。また、子どもたちに様々な支援制度（所属高校から情報が得にくい支援制度。例えば、社会福祉協議会が窓口の生活・教育支援金や民間の奨学金のプラットフォームサイト等 https://crono.network/）を紹介し、将来の展望、メンタル面の支え、気軽に相談できる居場所作りの側面を大切にしております。</p> <p>そして、新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、学校が休校になった3月以降は、学習相談だけでなく生活相談、さらにはクラウドファンディングによる食材配布など、生活困窮家庭の高校生の生活面・精神面も支えました。緊急事態宣言中は、従来の教室型の学習支援活動が制限される中、オンラインでの学習支援の仕組みづくりに挑戦しました。効果的な学習支援スキーム確立のため、スタッフの協力のもと、研修や学習会を行いました。</p>		<p>この事業の成果として、参加した子どもたちは、皆ほぼ安定して教室を利用し、成績面でも一定の効果が出ています。また上級学校の受験生については、1名を除き、皆志望校に合格しました。そして、一般入試で大学合格した生徒が、4月から大学生として、団体の学習支援スタッフ（中学生クラス担当）になり活動しています。今年度の利用者も、中学卒業後引き続き教室利用を希望する子ども達の入会を中心に18名に増やすことができました。</p> <p>また、学習を支えるサポーター（有償ボランティア）についても、研修をほぼ予定通り行い、支援者マニュアルを作成し、支援者としての研修を積むことができました。一方、当初計画していた塾講師検定については、現在の情勢に鑑み実施を見合わせ、11月に延期して行う予定です。</p> <p>事業継続を目的としたファンドレイジングについては、準備と実践を積み、臨時休校中の子ども達の食材支援のクラウドファンディングなど一定の成果はあったものの、団体全体を巻き込む運動（ムーブメント）になっていないことが今後の課題です。</p>				 <p>緊急事態宣言解除後の教室</p>	
		■ 望ましい社会状況を達成するための課題					
<p>高校生の学習指導面においては、学校ごとに学習進度があまりにも違いすぎることが当初から教室内の課題としてあがっていました。中学校と異なり、学校ごとに使用する教科書も種類が多く、その進め方もかなりの違いがあります。一方、高校生世代は自分に合った学習方法を身につけており、参加している生徒の学習意欲は高い傾向にありました。そこで生きた英語力を育成するために、従来私たちがやってきた寺子屋スタイル（各自勉強したいものを学習しそれをサポートするスタイル）ではなく、専用教材（教育企業のみ購入可能な教材）を使用して進めていくカリキュラムをつくって指導しました。そのノウハウは、現役の予備校講師をしている有償ボランティアの監修のもと、進捗と振り返りを重ねながら、効果的な支援ができるよう工夫しました。その成果として、英検準2級の合格者を2名出すことができました。</p> <p>また、研修・内部学習会によって、ソーシャルワーク（相談活動）やオンライン学習支援のノウハウ、さらには、資金調達・ファンドレイジングについても、プロボノ・アドバイザーの監修のもとプロジェクトチームを作り、実践を積みこつて経験をしながら当団体の状況（強みと弱み）にあったノウハウが蓄積しました。</p>		<p>「子どもの貧困」が社会問題として認知されてから一定の年月が経ち、現在では様々な支援制度（東京都私立高校無償化など）が生まれ、充実してきました。しかしながら、新型コロナウイルスの影響もあいまつて、高校生の置かれている状況は非常に不安定なものがああります。特に大学入試改革が開始されている昨今、対策に必要なノウハウの伝達、そしてモチベーションの維持など高校生の支えとなる場所が必要です。</p> <p>すでに多くの識者から、家庭の経済状況と高校中退率の関連が指摘され、困窮世帯の高校生への学習支援（基礎学力の定着から上級学校の受験や就職試験を含めたサポート）の充実と本人の意欲や自尊心に配慮した社会的自立を支援することが課題です。</p> <p>こうした中、助成事業で得られた知見やノウハウを、子ども達のプライバシーと自尊心に最大限配慮しながら、地域に発信していくことも重要だと考えています。</p> <p>現在では、経済的な理由で将来が制限される子どもの貧困問題（貧困の連鎖）は、当事者だけの問題ではなく、社会的な損失（貧困によって生じる所得の減少と財政負担の増加）だと考えられるようになりました。具体的には、子どもの貧困を放置すると、マクロ所得や労働供給が減少すると共に、政府からみると税・社会保険料収入が減少し、社会保障給付が増加することになっていきます。さらに地域にとっては、治安への影響や将来の世帯形成への影響も懸念されています。</p> <p>こうした情勢の中、今後は、地域から支援者を得ながら、可能な限り、行政の関係部署や委員会などに、ロープレ活動を積極的に行い、自治体の政策課題として検討してもらうよう働きかけ、補助制度さらなる拡充に繋げていきたいと考えています。</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習支援のスキーム ・生徒一人ひとりの目標達成への伴走 ・困窮家庭の助成制度へのつなぎ ・寄付を募ることの難しさ（団体内部スタッフの理解）を克服していくための構え <p>を達成しました。</p>	<p>■ 受益者の具体的な変化（効果測定結果等）</p> <p>学習支援だけでなく、気軽に何でも相談できる場所として安心感を持っていることが何よりも感じられる。高校生世代にとって、親や学校の先生以外の大人との関わりは重要で、多様な価値観に触れながら成長している実感がある。浪人を選択した生徒もいたが、何度も長時間相談と熟考を重ね、最終的に本人が判断し、保護者を説得できるほど、自分の道を明確にできている。</p>	